

バラ作りあれこれ

原 秀 雄

昨年の本誌(第六巻・第二号)にバラ隨想をのせたので、今度はその培養について二、三記してみることとした。バラを作る場合、地植、鉢植などいろいろの方法もあるが、ここでは地植の場合について記すこととする。バラは特に日光のよく当る陽地を好む植物であるから、植付の場所は陽当りのよい所を選ぶ。少くとも半日以上が当り、殊に朝日のよく当る場所を選びたい。建物の北側、西側などは避けたがよく、西日しか当らぬなどいう所はよくない。

バラは割合に粘質のやや重い土壌を好む性質がある。バラの種類の中には、ハマナスのように海浜の砂地に自生するものさえあるから、必ずしもどんなバラでも粘質の土でなければ育たぬものではないと同時に、ハマナスでも内陸の砂地でない場所に植付けてもよく育つし、かえつて生育がよくて大きくなる。結局バラの類は、かなり土質に対して適応性が大きいと考えてよいと思う。しかし一般には排水がよく、その上保水力のある肥えた土が最もよく、したがって砂がちの土地には粘土を加え、その上堆肥を加えるがよく、粘質の土地では、堆肥や砂を加えて土質を喬正する。黒ボクの土地も、砂質の土地に準じて土性の改良

を行えばよい。都会地では、狭い庭の数本のバラに施す堆肥でさえ中々に得難いが、このような所では、落葉、雑草、葉、縄切れ、鋸屑、厨芥など、腐朽するものは何でも堆積して腐らせ、一株にスコップ一杯くらいずつ施し、これを毎年つづけて土性を改良するとよい。また少し高価につくが、土壌調整剤クリリウム三キロを一アール(およそ三〇坪)に撒き、土表三センチ(一寸)くらいによくまぜておくと、土の固結を防ぎ、したがって根の発育をよくする。さてそれはとにかく、土地は深くよく耕し、株バラでは株間七五―九〇センチずつ離すようにするが、蔓バラは大きくなるので、一〇センチくらいの株間がほしい。またフロリバンダでは六〇―七〇センチでよい。株間が近すぎると、二、三年にして枝が込み合い、日光の不足、通風の不良から、病虫害の巢となることがある。

植付けの場所には深さ三〇センチ直径六〇センチくらいの孔を掘り、これの下部に堆肥を十分に埋込み、同時に遅効性の骨粉、油粕、鶏糞、魚粕、米糠などを施すのもよいが、これらを用いた場合には、一応土中で酸酵し終るまで、場合によつて異なるが、半月くらいは植付けを控えた方がよい。植

付けをいそぐ場合には、よく腐熟した堆肥だけにして、他の肥料は地表に盛るか、あるいは根からややはなして、地表に近く埋込むとよい。ただこの場合、魚粕は犬や猫に土を掘られることがあるから用いない方がよい。また植付けの際、草木灰を地面にまいて表土にまぜるようにする。二年目からは春株のまわりに孔または溝を作り、これに堆肥やその他の遅効肥料及び過磷酸石灰などを施す。草木灰その他のカリ肥料は、堆肥その他の窒素質の多い肥料とは施す位置、または時期を違える必要がある。これを元肥として、追肥には油粕、魚粕などの腐汁の上澄を水で四―五倍に薄め、剪定してから蕾が太つて色づくまで、毎週一回くらいずつ施す。量は木の太さや元肥、地味などによつて一様でないが、まず一株一回に〇・五―〇・八リットルくらいでよろう。話をもとにもどして、植孔に肥料を入れたら土を四―五センチ覆い、これに植付ける。植付けは四月から五月初め(札幌附近)頃をその時期とする。他から得た苗は、一夜水に根を浸して水揚げをするか、または湿りのある土に七―八日仮植して白い新根をふかせ、枝先を適当に整理してから植付ける。

苗はよく充実した、根に故障のないものを選ぶ。根にネマトーダや根頭癌腫病などの瘤のある苗、切接や芽接をした接目の不確実な苗、枝や幹の表皮に皴や傷のある苗、芽のしなびた苗、枝の色の正常でない苗などは避けねばならぬ。

植孔によく根を拡げて苗を据え、根を土

で埋めるが、接目が土表の直下に常に保たれるようにする。接目が土表の上にあると、接目が乾いて枯れたり、台芽が出やすくなり、深すぎると生育がおくれる。植付けの時には土を七、八分目覆つてから、一株にバケツ一杯分くらいの水を灌いで、根と土とのなじみをよくし、水がひいてから残りの土を埋める。植付けの時十分に水を灌げたら、日照りがつづかね限り灌水の必要はない。過度の灌水は根の生理を害し、遂に根腐れを起すことがある。勿論過度に乾くと生育を止めるから、そのような場合には灌水するが、それよりも土表株の周囲に、堆肥、落葉、鋸屑、穀殻などを三―五センチくらいの厚みにしいて、土中水分の蒸発をおさえる工夫をした方がよい。これをマルチングというが、その後も毎年五月頃にこれを行つて、秋九月末頃表土に浅くすき込むようにする。マルチングにより、土表からの水分の蒸散を防ぐ一方、黒点病などの病害をも防ぐことができる。

あと戻りになるが、バラの数多い品種の中、どのようなものを選ぶべきかは何より先にきめねばならぬことだが、何といつても、北海道のように寒い土地では、まず寒さに強い品種を植付けるべきで、株バラではフロリバンダやグラндиフロラ系統の品種など適当である。ハイブリッド・テイー系統のバラではビルゴ、エナ・ハークネス、コンフィダンス、ピース、ヘレン・トローベル、クリムゾン・グロリー、古いものではロード・ロスモア、E、G、ヒル、リリー・ポンス、オフエリアなど、これも

古い品種だが、ハマナス系統のバラ、例え
ばグロートンドルスト、グロートンドルス
ト・スープリム、ピンク・グロートンド
ルストなども寒さに強い。またハイブリッ
ド・パーペチュアル系の古いものだが、不
二（フラウ・カール・ドルシュキ）など
も寒さにつよく花もよい。同系統のパウル
・ネイロン（陽台夢、俗にアネチャンバラ）
なども株性及びこれの枝交りの蔓性ともに
寒さに強く、そのためか札幌附近の所に
見られる。蔓バラで、ノイバラが一方の親
になつてゐるものは最も寒さにつよく、古
い品種だが、クリムゾン・ラムブラーなど
はその典型的なものである。これはわが山
野にあつて、白またはちよつと薄紅をはい
た小さい花を梢頭に簇り咲き、バラノ砧木
に用いられるノイバラの一つの変種に、紅
葉色重弁のサクラバラというのがあり、そ
れがこのクリムゾン・ラムブラーであるとい
われ、一八九三年（明治二十六年）欧州
に伝えられ、アメリカには一八九五年（同
二十八年）にもたらされたということであ
る。それはとにかく、またテリハイノイバラ

系統の蔓バラも、花は小さいが丈夫でよく
花を咲く。バラには今品種名を記録されて
いるもの実に六、七千に及ぶが、年々新し
い品種の発表があつて、その数は増す一方
である。新しい品種を採り入れたい場合に
は、一年位は試験的に植えてみるとか、他
の意見を聞くとかしてから、植付に本腰を
入れるべきである。

順序が不同になりついでに剪定のことを
記しておきたい。バラのみならずいろいろ

な木の剪定を行う目的は、直接的には樹形
を整え、枯枝、被害枝を除き、樹冠の日当
り、通気をたすけ、間接的には病虫害を防
除し、木の勢力を均整にし、全樹を栽植目
的に合致させるといふのがそれである。バ
ラは系統によつて生育状態が異なるが、生
育するにつれて根際から新しい枝を次々と
発生し、古い枝は次第に老化して枯れ去る
から、毎年剪定整理する必要がある。剪
定は四月冬囲を除いた直後に行う。まずど
の枝にも日光がよく当り、通気がよくなる
ように株の内側に懐枝を作らぬため、枝の
先にはそと向きの芽を残す。枝端の芽から
は最も強い枝が出るので、残した芽の向き
によつて将来の株の形が左右されるからで
ある。

まずすでにできてゐる懐枝、枯枝、病枝、
細く弱い枝などは元からきり除き、残した
枝は株の状態、目的などにより剪定の程度
をきめることにする。深い強い剪定をする
と枝の数を少くし、その半面勢を強くする
が、軽い弱い剪定をすると枝を多く出すが
伸長力を弱めることとなる。庭の植込また
は花壇植の株バラでは、割合に軽い剪定に
止めて枝を多く出させ、次から次と花を多
く咲かせるがよく、品評会用に栽培する株
では、強い剪定を行つて花枝の数を、従つて
花の数を少くして、美事な花を咲かせるよ
うにする。しかし毎年強剪定をつづけると
根の発育に悪影響を及ぼすことがある。こ
れは強い剪定によつて枝の発生従つて葉の
着生をおさえ、同化作用を鈍らせるため、
根の発育を不十分ならしめることとなる。

ハイブリッド・ティー系統のバラという
今日作られてゐる株バラの大半がこれに属
するが、まず植付けた翌春には新枝に二
三芽を残す程度の強い剪定を行い、その翌
春には木の勢を見極めて、新枝の半分乃至
三分の二を残す中乃至弱い剪定をするに止
める。つまり勢のよい木には弱い剪定を、
弱い株には中位の剪定を行う。植付け後三
年目からは、枝の若返りを行うこととな
る。バラの類は、根元から太く長い枝を発
生する性質があるから、これを丈夫に育て
て古くなつた枝を根元から剪り除き、新旧
の枝を交替させる。機会をとらえて毎年こ
れを繰返すと、永年バラを若々しく保たせ
ることができぬ。

ノイバラまたテリハイノイバラ系の房咲
小輪の蔓バラは、前の年に根際から出た勢
のよい長い枝に今年短かいわき枝を何本か
出し、これに花をつける性質があるから、
春夏の頃に根際から出る太く長い枝は大切
にしてよく生育させ、また花が咲いた前年
生の枝は花後（八月上旬）根元から剪り
去る。春には前年の年に出た今年の開花母枝
は、支柱その他の高さに合わせて枝の先を
軽く剪るに止め、弱い枝、病枝、剪り残した
前年の花枝などもこの時に除き、株を清潔
にする。蔓バラの中には、地際から都合よ
く太く長い枝を出さぬものがある。このよ
うなものでは春主枝の一、二本を根元から
六〇―九〇センチに切り縮める。つまりや
や剪定を行い、その刺激で勢のよい枝を発
生させ、開花母枝にして、古い枝を根元から
去り、主枝の交替をはかる。また蔓バラに

は株バラの枝交りしたものがある。この系
統のものは十分に伸びぬ中に剪定すると、
株バラに逆もどりすることがあるから、植
付け後二年位は、弱い枝、病枝などを剪
位に止めて十分に伸長させ、主枝がよく伸
長充実した後、春その先を軽く剪り、開花
枝の発生を促すようにする。また根元から
出る枝で、太く長く伸長するものは、次代
の主枝としてまづすぐに生長させ、発生し
た次の春枝先を軽く剪り、地上六〇―九〇
センチの所でこれを横に曲げて伸長を抑え
ると、曲げた部分から先に一整に開花枝を
発生して開花する。また曲げたあたりか
ら、花の後に太い枝を発生することがある
から、翌春曲げた所から先を剪り除き、新
しい枝を曲げて開花母枝とする。このよう
なことを毎年繰返すが、開花枝は花の後二
―三葉を残して剪り去る。

フロリバンダ系のバラは、花は割合に小
さいが多数に咲くので、中々に美事である。
改良が進むにつれて段々とハイブリッド・
ティーに花の大きさなどが近づきつつあ
り、グランディフロラとよぶ系統のものが
それである。この一類のバラは、春弱い剪
定を施すと四季咲性は發揮するが、木の栄
養生長のためには余り有効でなく、弱い細
い枝が多数出て樹勢が衰へ、花つきもわる
くなる。これに反して強い剪定を行うと、
樹勢が強いため樹形がくずれ、花の数も少
くなり、中位の剪定では花つきもその質も
よくなるが、四季咲性は弱剪定の場合に劣
る。それで一般に強剪定を避け、中位の剪
定と弱い剪定とを一株の中に並行して行う

と、良い花を常に咲き、樹勢も適度に保たれる。まず植付の翌春には中位の剪定を行い、その翌春には、前年根元から出た枝には弱い剪定を行い、前の春に中位の剪定を行った枝から出た新枝には、この春も中剪定を施す。このようにすると、弱い剪定をした枝はよく四季咲性を發揮し、中剪定した枝からは根元に新枝を生じ、かつ多数の花をつける。その次の春からは漸次に枝の更新を行うこととなる。一般に肥えた土地では根元から次々に枝を出すことがあるから、このような場合には中位よりやや弱い目の剪定を施すと株もよくなり、かつ四季咲性を發揮させることができる。ポリアンサ系のバラもフロリバンダ系のものに準じて剪定する。

ハイブリッド・パーベチアル系のバラ例えば不二とかパウエル・ネイロンなど前述したが、樹勢が甚だ強く、時に半蔓性となるものも多く、春強い剪定を行うと花を咲かぬことがあるから、懐枝、弱小枝、病枝、交叉枝などを剪り除く他、残す枝には常に弱剪定を施すに止める。ハマナス系やモス系のバラも同様の剪定を行う。

バラにはいろいろの病虫害を数えるが、余白が少ないので、簡単に防除法を記すと、六月初め頃ボルドー液（水和剤二〇―三〇グラムを水一〇リットルに溶す）一〇リットルに、水銀剤（リオゲン水和剤またはウスプルン）一二グラムをまぜたものを、殊に葉裏によく撒布して黒点病に備え、ウドンコ病には軽症の中に石灰硫黄合剤の八〇―一〇〇倍液、ソイド（水和硫黄剤）二二

グラムを水一〇リットルに溶したものを、カラセン九―一八グラムを水一〇リットルに溶したものなどを撒布し、また風通しをよくする。立枯病には水銀剤の千倍液を用い、銹病には五月初め頃から時々石灰硫黄合剤の一〇〇倍液を撒布して予防し、また冬囲前同合剤八一―一〇倍液を撒布する。またソイド（濃度ウドンコ病の場合と同じ）の撒布も効がある。ウドンコ病以外の病害は病枝、病葉をとり去ることも必要である。

カイガラムシは主に枝の古い部分につくが、これには各囲前に七―一〇倍にうすめた石灰硫黄合剤を、また幼虫の発生する六月中下旬頃八一―一五〇倍に薄めた同剤を撒布する。アブラムシ類にはロテゾール（六〇〇―一八〇〇倍）ペントリン（四〇〇―一八〇〇倍）BHC粉剤またはBHC水和剤（二〇グラムを水一立）などで速かに駆除する。

秋十月末には雪に折られないよう、また弱いものは凍害を受けぬように冬囲を施す。蔓バラは支柱などから外して蔓を地面に倒し、雪の下にしておく。また蔓を束ねて藁で巻くのもよい。また株バラには竹三―四本を添えて縄で束ね、また弱いものは箆で巻いて寒風を防ぐ。根元には土か落葉を寄せると効がある。箆や藁などで囲つたものは、春先余り早く囲いを取除くと、晩霜で芽を傷められることがあるから、四月十五日以後にこれを行うべきで、できれば二十日すぎに行うようにしたい。

（北大助教・植物園勤務）

本年度北海道農務部普及奨励事項

（S・M・S剤）

スターグリーンの新しい添加剤

草サイレーシの調整は案外にむずかしくしばしば失敗を認め勝ちのものです。近年欧米で著効が認められ、また、わが国でも北海道農務部の研究により遂に実用化されたS・M・S剤を添加すると

- (1) 調製中の変敗がなく廃棄すべき部分が多く生じない。
- (2) 鮮やかな緑色を呈し、甘い芳香に富んだ嗜好性の頗る高い極めて良質な製品となる。
- (3) 栄養分の損失が僅少である上、カロチンが良く保持されている。
- (4) 特に蛋白質、脂肪等の消化率が向上する。

等々の特色をもつ理想的な草サイレーシを調製することが出来ます。弊社がこの度新発売したS・M・S剤「スターグリーン」について以下簡単にご紹介いたします。

スターグリーンの性状

硫酸に似た白色の粉末で、吸湿すると多少刺戟臭のある亜硫酸ガスを発生します。

スターグリーンの使用法

スターグリーンを添加する場合は、サイレーシの調製法そのものは、塔型サイロ、トレンチサイロを問わず普通の場合とほぼ処理別草サイレーシの品質及び分析成績

同様ですが、

- (1) 理草材料としては牧草、青刈類、野草など何でも良いが、豊科草が多い程よい。
- (2) 材料の水分は七四―八二%が良く、遅刈したもの、予乾の過ぎたものは避ける。
- (3) 材料は必ずカッターで一・〇―一・五に細切すること。
- (4) 添加量は材料一トンに対し四―五担（〇・四―〇・五）であるが、若干多めの方がよい。
- (5) 均一な添加を図るため、米糠、麩などで二―三倍に増量し、カッターの切込口から手加減しながら適量を添加します。
- (6) 塔型サイロではスターグリーンの発生する亜硫酸ガスが充滿するので、切込み中の中踏み作業は困難ですから、最初無入のまま塔内埋蔵量六〇―七〇%を一度に切り込み、次に一旦材料とスターグリーンの供給を中断してカッターを空転させ、塔内の換気を図り乍ら一〇―一五分間数人で一挙に均し作業と踏圧を行います。トレンチサイロの場合はマスクをすれば別に困難を感じません。
- (7) 給与は必ず理草後四―四五日以上を経過してからに限りませす。
- (8) 夏季高温時は取り出し中に変質し易いので、一日当り取出量を二五―三〇%とします。

（北海道農試畜産部）

処 理	色沢及び香氣	PH	酸 組 成		区 分
			総酸	不揮発性酸	
無 処 理	褐色	四・三	100	100	原 料
新鮮	刺戟臭	四・三	100	100	サイレーシ
S・M・S (〇・四%)	鮮草色	四・九	100	100	サイレーシ
	新鮮臭	四・九	100	100	サイレーシ

一般組成（無水物中の%）

水分	粗蛋白質	粗脂肪	粗纖維	粗灰
六三・三	四・四	四・六	五・九	九・九
六三・三	五・四	四・六	五・九	九・九
六三・三	五・四	四・六	五・九	九・九
六三・三	五・四	四・六	五・九	九・九